

聖書：ローマ 8：35～39

説教題：圧倒的な勝利者

日時：2016年1月3日（朝拝）

ローマ人への手紙 8 章のクライマックスの部分となります。パウロはこれまで神の福音について解説しながら、その階段を一つ一つ上って来ました。そして 31 節で「では、これらのことからどう言えるでしょう。」と述べて、その結論を書き記しています。彼がここで明らかにしたいと思っていることは、「クリスチャンの救いの絶対的な確かさ」です。これを語る必要があるのは、クリスチャンはこの世では厳しい戦いの中にあるからです。35 節に「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。」と、色々列挙されています。誰でもこのような目に会いたくはありません。患難、苦しみ、迫害といった世からのひどい扱いを受けたくありません。食べ物がなく、飢えたり、着る物がなくて裸になりたいとも思いません。また危険、剣といった命を取られるかもしれない状態に追いやられたくもありません。しかしクリスチャンはこのような状態にしばしば置かれました。たとえばパウロは自分自身の経験として、II コリント 11 章 23～27 節でこう言っています。「私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、またむち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から 39 のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」これはパウロだけの話ではありません。信仰の勇者について記されているヘブル書 11 章 35 節からの箇所にもこうあります。「またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざつけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、云々」

果たして今日の私たちはどうでしょうか。世界のある国では、今でも信仰を守る

ためにいのちをかけた戦いがなされています。そのような人々に比べると、私たちの苦しみはずっと少ないかもしれません。しかし私たちは自分は幸運な国に生まれて良かったと胸をなでおろして良いのではありません。キリストに従うなら、大なり小なり、必ずこの種の苦しみがあるというのは聖書のあらゆる箇所が語っていることです。イエス様もヨハネの福音書 15 章で「この世はわたしを迫害したのだから、あなたがたをも迫害します。」と言われました。事実、私たちが信仰に生きていることを皆が快く思ってくれるわけではありません。私がクリスチャンであるために良い顔をしない人たちがいるものです。また信仰者としての生き方を貫こうとすると、色々難しい状況に投げ込まれることもあります。もしそのような経験が少しもないと言うなら、私たちは自分に問うてみなければなりません。それは私が世とぶつからないようにうまくすり抜けているからではないのか。信仰に固く立っておらず、その場その場で適当に妥協し、世に迎合しているからではないか。

パウロは 36 節で、このような苦難に会うことはクリスチャンにとって普通の姿であることを、詩篇 44 篇を引用して思い起こさせています。「『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊と見なされた。』と書いてあるとおりです。」　ここの「あなた」とは神のことです。神を信じ、神に従うために、信仰者は「一日中、死に定められている」とまで表現されるような苦難を経験して来た。これは神に従う者たちの定めなのです。私たちは苦しみに会うと、なぜこんなことが信者の私に起こったかと驚き慌ててしまいますが、この種の苦しみは避けられないのであって、かえってこれらのことの中に、自分は旧約以来の聖徒たちと同じ道を歩いている神の民の一人なのだという立場を確認することさえできるのです。

しかしパウロが言いたいメッセージは 37 節にあります。それは「私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となる」ということです。私たちは苦しみの中でその餌食となったり、命からがら何とかそこから助かるというのではないのです。何とそれらすべての中で大勝利を収めることになる。文語訳によれば「勝ち得て余りある」者になる。なぜそのようなことになるのでしょうか。パウロはここで「私たちが愛してくださった方によって」と述べています。この「愛して下さった方」は、35 節とのつながりから見て、キリストを指していると考えられます。そして「愛して下さった」は過去

形で語られていますから、これは過去のある出来事、特にイエス・キリストの十字架のみわざのことが考えている言葉と言えます。キリストは私たちを愛して、その尊いのちを十字架上でささげて下さいました。しかしこの愛は、単にロマンティックな愛の表現で終わるだけのものではありません。キリストの十字架の死は、明確な目的をもってささげられたものです。すなわち私たちを完全に救い出すという目的です。キリストはその十字架の死によって、私たちの罪の値を完全に支払い切って三日目に復活されました。そして 34 節で見たように、今や神の右という至高の座に上げられました。従ってキリストはこの世のあらゆる力、迫害、患難、問題などのすべての上にありますお方になった。そしてそこで私たちのために今日も力強くとりなしてくださっています。であるなら、たとえ私たちが今、どんな患難や苦しみを経験していても、そこに埋没して私たちが終わりになることはあり得ない。それらを越えて、キリストが私たちを「圧倒的な勝利者」へと導いてくださるので

私たちはすでに 28 節で神の方法は「すべてのことを働かせて益とする」というものであることを見ました。やがての日に明らかにされることは、私たちが経験している苦難さえも私たちの救いのために大いに役立てられたということです。今は苦難が見せかけ上、私たちに勝っています。私たちはその下であえぎ、敗北しているかのようです。ところがやがての日に、それらは全部、私たちの救いに役立てられていたことが判明することによって、実はそれらが圧倒的に負けていたことが示される。反対に私たちはそれらをフルに利用して大勝利を収めた者として高く上げられる。これは私たちを愛してくださった力強い救い主によって私たちに実現することです。キリストと結ばれ、キリストのものとされ、キリストにとりなされている者なら、必ずこうなるのです。私たちはそのことを信じ、喜び、告白しながら、キリストを賛美して、やがての大勝利へとつながっている今日の歩みへと進むことができるのです。

さてパウロはさらに 38～39 節の言葉を続けます。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」 これまで私たちを圧倒的な勝利者へと導く「キリストの愛」について私たちは見て来ました。しかしそ

のキリストのもとで私たちはもう一つの愛を知ることになります。それは神の愛です。この「キリストの愛」と「神の愛」は切り離すことができません。私たちはまずキリストのもとに行き、キリストがどんなに私を愛してくださったかを知ります。しかし私たちはそこでさらに神が私たちを愛してくださるといふ壮大な愛に打たれずにはいないのです。これを見る時に思い起こされるのはヨハネの福音書 10 章 28 節～30 節の御言葉です。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしを彼らにお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれも私の父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。」 ここでもまずイエス様が私たちをしっかりと、その愛の御手の中に握って下さることが語られています。しかしこれは同時に私たちがすべてにまさって偉大な父の御手の中に握られていることをも意味しています。このことが本当なら怖いものはもう何もないでしょう。一体誰が、キリストと神の御手の中にある私に対して、本当の意味で傷つけたり、呪いの下に置くことなどできるでしょう！

パウロはこの神の絶対的な愛と守りを語るにあたって、私たちを神の愛から引き離し得ると想定されるいくつかのリストを 38 節以降であげています。これは完全にすっきりは並んでいませんが、ほぼ二つずつのペアで言葉が並んでいます。まず最初のペアは「死も、いのちも」。健康で何もかもうまく行っている時、この言葉は私たちに少しも響かないかもしれませんが、たとえば自分が病院のベッドの上において死が近いかもしれないという状況にあることを考えてみて下さい。「死」と「いのち」。これはその人が直面している究極の二つの道です。人生はこの二つのどちらかです。自分はこれから死ぬかもしれません。しかしその死の状態もキリストにある神の愛から私を引き離すことはできない。仮に死に至らず、いのちにとどまっても同じです。どちらに転ぼうが、どちらにあってもキリスト・イエスにある神の愛が私を守ってくれる。二つ目のペアは「御使いと権威ある者」。「御使い」は良い霊を指しますが、「権威ある者」と訳された言葉は、例えばエペソ書 6 章 12 節では特に悪霊を指す言葉として用いられています。ですからこの二つの言葉は私たちのレベルを超えた様々な霊的存在・天的存在を指しているのでしょう。聖書ははっきりとこの世界にはもろもろの霊的存在があると言っています。またそれらは私たちより強い存在で私たちに働きかけてくる存在です。しかしそれらをも私たちは恐れる必要がない。たとえ得体の知れない力が自分に作用しているように思ってもキリ

スト・イエスにある神の愛から私が引き離されることはないのです。3つ目のペアは「今あるもの」と「後に来るもの」。これも死を前にした状態を考えると分かりやすいでしょう。後に来るもの、すなわちあの世のことを私たちは詳しく知りません。それは私たちにとって未知の世界です。そういう意味で不安があります、しかしその世界に入っても神の愛が私から離れることはないと知っているなら大丈夫、安心です。次の「力ある者」という部分はペアになっていません。うまく説明がつきませんが、あらゆる力ある存在を指しているのでしょうか。そして次のペアは「高さ」と「深さ」。これは私がどんなに高いところに引き上げられても、あるいは逆にどんな深い地の底のような場所に投げ入れられてもということでしょう。詩篇 139 篇 8 節：「たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。」 そのような今とは違う場所に移されても神の愛が私からとり去られることはない。最後にパウロは、すべてを網羅するために、「そのほかのどんな被造物も」と付け加えます。そしてこれらの何ものも「私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません！」と宣言するのです。

私たちは先に、私たちに対するキリストの愛を見て来ました。ある意味でそれだけで十分です。私たちはキリストによって圧倒的な勝利者としていただけます。しかしそのキリストのもとで私たちが知ることは、このキリストを私たちに与えてくださったのは父なる神であった！ということです。つまり私たちを愛しておられるのはキリストだけではない。何と神ご自身が私たちを愛して、このキリストを与えてくださった。神にとってキリストを与えることはどんなに大きな犠牲であったかを 32 節で見ました。御子は神にとって永遠に昔から愛して来られた特別の一人子です。その方さえも神は惜しまずに私たちのような者たちの救いのために与えてくださった。ここに私たちは、神の測り知れない私たちに対する絶大な愛を知るのであります。永遠に賛美しても賛美し尽くせない愛を知るのであります。その愛の中に私たちは置かれているのです。そしてその神が 30 節で見たように、栄光のゴールに向かって確実に導いてくださいます。この神の愛が私を包み、守っていてくださると知れば、もはや何の心配も必要ありません。何があっても絶対大丈夫。ただただ私たちはこの真理に圧倒され、感謝の歌を歌うしかないのです。

私たちはこのローマ書 8 章で素晴らしい真理をいくつも見て来ました。特に三位

一体の神の愛と守りを見て来ました。今、私たちの内には聖霊が住んでくださっています。聖霊は私たちの内で、アバ、父よ！と私たちに呼ばせてくださり、私たちに神の子であることを確信させてくださいます。また私たちとともにうめきつつ、確実にとりなしてくださいます。そして私たちは内側にこのとりなし手を持っているばかりか、私たちのために死んでよみがえり、今や天にいるキリストが神の右の座で力強くとりなして下さっていることも知りました。地上からも天からもとりなされている私たちです。そして神は永遠の昔から私たちを愛し、ご計画を立ててくださり、尊い御子を与えて、栄光に向かって導いて下さっています。この三位一体の神を仰ぐなら何が一体不確実でしょうか。そのようなものは何もありません。どんな中でも私たちの救いは確かであり、最後の目標に至ることは確実なのです。

2016年の歩みも、ただ恵みにより、こうして開かれました。この年を歩み出すにあたって、この御言葉から教えられることは、この年の私たちの歩みもこの神の絶対的で確実な守りの下にあるということです。どのようなことがあっても、神の民の定めである様々な苦難の中に置かれても、この三位一体の神の愛と守りの中で私たちは必ず圧倒的な勝利者へと導かれて行く。ですから私たちのすることは、この神に私たちのすべての信頼と希望を置き、慰めと平安を頂いて、この神に従う歩みをささげることでしょう。28節の言葉で言えば「神を愛する人々」としての歩みをささげることでしょう。またまだ信仰に歩んでいない人にとってはキリストのもとに行くことです。神の愛はキリスト・イエスにある愛です。他のところにはこの神の愛は見いだされません。キリストこそ道であり、真理であり、いのちです。このキリストを通してでなければ誰も父のみもとに行くことはできません。しかしキリストのもとに行き、キリストの愛を知る時、私たちはさらに偉大な神の愛をも知るようになるのです。そこに圧倒的な勝利を確信し、心から神を御名を賛美しつつ歩む信仰者の何よりも確かで幸いな歩みがあるのです。